CHESS Magazine

#23

December 2025
japanchess.org

全日本チームチェス選手権2025

[体験記]永井斗志之

FIDE World Cup 2025 Tran Thanh Tu

FIDE World Youth Chess Championships 2025 遠藤美紀

名プレーヤーから学ぼう vol.15 Kasparov 山田弘平 他

Japan Chess Federation

CHESS Magazine #23 December 2025

03 全日本チームチェス選手権2025
［体験記］ 永井斗志之

09 FIDE World Youth Chess Championships 2025
遠藤美紀

12 FIDE World Cup 2025
Tran Thanh Tu

26 名プレーヤーから学ぼう vol.15 Kasparov
山田弘平

34 チェス大会inアメリカ NO. 86 上杉賀子

35 ボランティアスタッフ募集のお知らせ

New!

記事を気に入っていただけたときは、ページ番号横の ♥ ボタンを押してください (複数選択可) 。
今後のCHESS Magazine制作の参考とさせていただきます。

Tournament Report

大会レポート

全日本チーム チェス選手権2025

全日本チームチェス選手権2025　オープン 優勝　The Vibrants

全日本チームチェス選手権2025

2025年11月1日（土）と2日（日）、きゅりあん（品川区総合区民会館）を会場にして全日本チームチェス選手権2025が開催されました。4人1組のチーム戦で、6Rスイス式、持ち時間30分+30秒/手の国内公式戦です。毎年恒例の大会ですが、今年の新機軸はチームの平均レーティングが1400以上のチームはオープン、1400未満のチームはグループAと分けてペアリングした点です。なお平均レーティングが1400未満でも希望によりオープンに出場したチームが2つありました。北海道（Sapporo City Chess Team）と九州（Kumadai Chess Circle）からも参戦したチームがあり、総勢59チーム（オープン：38、グループA：21）、265名（オープン：172、グループA：93）が出場。過去最大だった昨年（54チーム247名）をさらに上回るビッグイベントとなりました。

日ごろからクラブの例会で顔見知り同士のチームがあれば、かつて高校や大学のチェスサークルで腕を磨いた仲間たちの一年ぶりの“同窓会”もあり、企業内サークルからも2チームが参戦しました。大会の常連もいれば、大会出場が初めての人も少なからず、多士済々のチェス愛好者たちが集まりました。

試合前はなごやかに世間話に花を咲かせ、しかし試合が始まればピリッと顔が引き締まり、盤面を一心に見つめ合う選手たち。同じクラブからのチーム同士の対戦であっても、親しきなかにも礼儀ありで、互いに持ち時間を一杯に使って考えての真剣勝負は、すがすがしいスポーツマンシップでした。また、自分の試合が終わった後、未だゲームが続いている仲間の盤面を背後からのぞいて、ハラハラ、ドキドキ。他人のゲームをこれほど熱心に観戦することはあまりありません。チームチェス選手権ならではの、いろいろな楽しさが詰まった2日間でした。

オープンでは 、5連勝でHongo Chess no Kai が首位をひた走っていましたが、最終ラウンドでドラマが起きました。10代と20代が2人ずつの若い The Vibrants（中原鑑、　森谷翔、　松山紘也、松永冬馬）がHongo Chess no Kai を3-1で倒し、逆転で1位となったのでした。

グループAではレーティング順位では7位に甘んじたKeio A（米久保奏都、竹内惇、名越勇俊、Tran Trung Dung）が次々と相手チームをなぎ倒し、6連勝。独走でゴールインしました。

入賞された皆さま、参加されたすべての選手の皆さま、お疲れさまでした！

グループA 優勝 Keio A

入賞者
＜オープン＞
チーム賞

1位	The Vibrants	11.0/12P
2位	Hongo Chess no Kai	10.0
3位	Osaka Tigers	10.0
4位	Azabu OB	9.0
5位	Tokyo Check Mates Kuro	9.0

学生チェス連盟加盟
サークル

1位	Kyodai Chess Circle A	7.0/12P

ボード賞

1B	FM 山田 弘平	6.0/6P
2B	米満康平	5.0
3B	横山友紀	5.0
4B	CM 松尾朋彦	6.0

＜グループA＞
チーム賞

1位	Keio A	12.0/12P
2位	Minamoto Chess	9.0
3位	Kyodai Chess Circle B	9.0
4位	Yokohama Rooks	8.0
5位	Machida Promotion	8.0

学生チェス連盟加盟
サークル

1位	Keio B	5.0/12P

ボード賞

1B	奥野 凜音	5.5/6P
2B	光浪 創希	5.5
3B	名越 勇俊	6.0
4B	De Moraes da Silva Gabriel Keven	5.5

＜全日本チームチェス選手権2025 特別賞＞

町田チェスクラブ

受賞理由：本大会に町田チェスクラブから5チーム/23名が出場し、かつ、おそろいのユニフォームで大いに大会を盛り上げたため

学生チェス連盟加盟サークル オープン 第1位 Kyodai Chess Circle A

オープン 2位 Hongo Chess no Kai

オープン 3位 Osaka Tigers

グループA 2位 Minamoto Chess

グループA 3位 Kyodai Chess Cercle B

学生チェス連盟加盟サークル グループA 第1位 Keio B

オープン ボード賞

グループA ボード賞

特別賞 町田チェスクラブ

全日本チームチェス選手権2025　体験記

永井斗志之

2025年11月1、2日にきゅりあん(品川区立総合区民会館)で開催された全日本チームチェス選手権2025。当初の予定とは異なり、運営スタッフで参加しました。

普段は個人戦の印象が強いチェスですが、本大会は学生サークル、コーチに率いられた生徒の方々、定期的に例会を行っている各地の盛んなクラブからなど、編成も経験も様々なチームがエントリーされていました。

いつもはクラブ内で対戦相手として競っている仲間が、頼もしい味方として戦う姿を見られるのはこの大会ならでは、と感じます。個人的には双方のチームのエース対決を観戦するのが大好きです。

担当した部屋で諸事情により4人揃えられないチームもありましたけれど、諦めずに戦う姿もかっこよかったですよ。

アービター面からは、スリーフォールドレピテション(三復同形)のドロー主張を受け、結果的に不成立でゲーム続行になった際、ルールを把握していないことを謝罪されましたが、主張はプレーヤーの権利であり、その判断をするのがアービターの役割なので、悪く思う必要はないですよ(笑)。

また、参加人数が250名を超える大会で、事前にお願いしていたゴミの持ち帰りにもご協力いただき、大会の規模に比して非常に忘れものが少なくて助かりました。

選手のみなさま、各チームを統率してくださったキャプテン・保護者のみなさまがたもありがとうございました。また次回も参加したいと思っていただける大会になっていればこれ以上なく幸いです。

今後ともよろしくお願い致します。

3

16

5

8

FIDE World Youth U14, U16 & U18 Championships 2025

遠藤美紀

FIDE World Youth U14, U16 & U18 Championships 2025 が、10月3日から16日までアルバニアのドゥラスで開催されました。83カ国から719名が参加し、U18・U16・U14のオープンと女子の6カテゴリーで競技が行われました。各国のトップユースが集まる大会だけあり、大会平均レーティングはU18が2193、U16が2069、U14が1998と非常に高く、世界ユースの名にふさわしいレベルの高さが感じられました。

日本からはU16にNg Alexander PN 選手、U14に遠藤秀馬選手が参加し、40手までは90分、その後30分が加算され、さらに初手から30秒が加算されるクラシック方式で、休息日を挟みながら11ラウンドの試合に臨みました。

息子の秀馬は台湾で6歳からチェスを始め、8歳で初めてFIDEスタンダード大会に出場しました。コロナ禍で大会参加が難しい時期もありましたが、2022年末からは日本やアジアの大会に少しずつ出るようになりました。世界ユースは開催期間が長く、開催地も遠いため参加を迷っていましたが、今年は学校の秋休みと重なったこともあり、思い切って挑戦することにしました。

10月2日に出発し、飛行機を2度乗り継いでティラナ国際空港に到着したのはほぼ1日後。空港の出口には大会名の入ったウェルカムブースがあり、世界中から選手が集まっているのを見て、まずは無事に辿り着けたことにほっとしました。バスでアドリア海沿岸のドゥラスに移動し、会場となる Grand Blue FAFA Resort Hotels にチェックインしました。

今回特徴的だったのは、会場環

境の快適さです。これまでの海外大会では、ホテルから会場へのバス移動が長かったり、大会会場のエレベーターが混雑して開始時刻に間に合うか心配になることも少なくありませんでした。しかし今回は低層のリゾートホテル内で試合が行われ、多くの選手が徒歩5分以内で会場に着くことができました。会場前に保護者が滞留する必要もなく、参加者全体が落ち着いて大会に臨めていた印象です。

部屋は広く清潔で、食事はビュッフェが100種類以上もあり、毎日のように焼きたてのピザが並びました。選手たちが食事を楽しそうに選んでいる姿が印象的でした。

テクニカルミーティングでは、タイブレークやアンチチーティングについて丁寧に説明がありました。服装ルールはアジアの大会より緩やかでしたが、スリッパやサンダルは禁止されるなど、一定の基準は保たれていました。アンチチーティングは近年どの大会でも厳格ですが、世界ユースも例外ではなく、3つの入口で全身の金属探知機チェックがあり、試合終了後はすぐに指定出口から退室しなければなりません。名札を忘れた選手が取りに戻される場面もありました。

息子の試合は全11局のうち、40手後に30分追加が入る展開は3局だけでした。その3局はなかなか部屋に戻ってこないので、ひょっとし

て負けてどこかで泣いているのではないかと心配して迎えに行ったほどです。息子が設定している海外大会での目標は、スタート順位より上で終えることと、パフォーマンスレーティングを自己レーティングより上にすることです。今回は順位を少し下げましたが、後者は達成できました。とはいえ、本人としては「もっとよい結果を出せるよう、さらに頑張らないと」と感じたようです。

夕食後はほぼ毎晩のように、Alex君とホテルのロビーでブリッツをして過ごしていました。負けて落ち込んだ日でも、彼と指して戻ってくる頃にはすっかりいつもの表情に戻っており、同じ国の仲間の存在が子どもにとってどれほど心強いのかを実感しました。

6ラウンド終了後には休息日があり、主催者が準備した Durres と Kruja のツアーに参加しました。美しい景色に加え、アルバニアの歴史にも触れることができ、とても充実した一日でした。休息日前夜には、息子の対戦相手となったボスニア・ヘルツェゴビナのユース選手たちとプールサイドでブリッツをする姿が見られ、こうした自然な交流の広がりも国際大会ならではだと感じました。

大会結果は男子のすべてのメダルと女子のほとんどがアジアチェス連盟所属の国の選手によって獲得され、ユース層におけるアジア地域の層の厚さを目の当たりにしました。閉会式にはアルバニア大統領やアルバニアオリンピック委員会会長も臨席し、同国でのチェスの社会的地位の高さもうかがえました。

試合後にはアメリカ、ポルトガル、台湾の選手たちと遅くまでバグハウスに興じ、多くの国の仲間と交流する様子が見られました。こうした時間も含めて、海外大会が子どもたちに与える影響の大きさを強く感じました。

海外の大会には、多くの経験豊富な選手が集まります。FIDE大会の出場経験がまだ多くない選手にとっては簡単にポイントが取れない場面もありますが、そのなかで強い相手に向き合い、長時間考え続けること自体が大きな経験になるように思います。AIが生活に深く浸透する現代において、自分の頭だけを頼りに数時間思考し続ける「頭脳スポーツ」としてのチェスの魅力も改めて感じました。

また、大会を通じて世界中の同年代の仲間と交流し、多文化に触れながら過ごす時間は、子どもたちにとって大切な学びの機会だと思います。チェスを通して広がるこうした経験が、今後の成長につながっていけばと願っています。

FIDE World Cup 2025

Tran Thanh Tu

Photo by Shahid Ahmed.

再び世界の舞台へ

2025年のFIDEワールドカップ（ゴア）で日本代表として出場することを知ったとき、胸の中には、これまでと同じように「期待」と「責任感」が入り混じった感情が広がりました。前回のワールドカップから2年が経っていましたが、この舞台に立つ喜びは決して色褪せることがありません。再び日本の国旗を背負って世界と戦えることは、当たり前ではなく、常に光栄に思っています。

今回は、これまでにない特別な思いがありました。ここ数年、全日本選手権ではあと一歩のところで優勝を逃し続けていましたが、2025年にようやく優勝をつかみ取り、それが大きな自信につながりました。ワールドカップの出場権を得たことは、これまでの苦しい決断や、長いトレーニングの日々、そして数えきれないほどの挫折が報われた瞬間でもありました。

この大会に出場することは、日本のチェス界にとっても大きな意味を持っています。世界の舞台で、日本も確かに存在感を示せるのだということ。そして、チェスを始めた頃の自分のように、どこかで誰かの夢につながるかもしれない、そんな思いも胸にありました。

全日本選手権で優勝した後も、長く祝うことはしませんでした。すぐに気持ちを切り替え、準備に集中しました。ワールドカップは本当に過酷な大会です。相手が誰であっても、初手から最高の準備が求められます。

大会までの準備期間（夏～10月）

ワールドカップ出場が決まってから、私がまず心に定めた目標は明確でした。

「最低でもRound　1を突破すること。そして、その先は一歩ずつ積み重ねること。」

ノックアウト方式の大会では、何が起こるか本当にわかりません。だからこそ、目の前の一局に全力を注ぐしかない。そんな思いで、私は静かに準備を始めました。大会に向けて取り組んだのは、大きく3つです。

体調管理、オープニングの見直し、そしてミドルゲームテクニックの強化。

この時点ではまだ初戦の相手が決まっていなかったため、特定の選手に向けた準備ではなく、日々の鍛錬をさらに深めるような形で

Photo - (C) 2025 FIDE, Michal Walusza.

した。夏の大会では、いくつか新しいアプローチにも挑戦しました。しかし、結果は決して良いものではなく、レーティングも大きく落ち込みました。それでも、その試行錯誤はすべて「必要なプロセス」だったと信じています。勝てなかった理由を自分の中で整理し、反省し、次につなげる。その積み重ねこそが、最も確実な成長の道だと思っていました。

こうして私は、ワールドカップに向けて準備を進めていきました。

初戦の相手が決まる 相手への準備

10月初旬、FIDEからトーナメント表が公開されました。開幕までは約4週間。自分のレーティングから考えて、初戦は2600台の強豪と当たるだろうことは覚悟していました。誰が来ても簡単な相手ではない、そう理解した上で表を開きました。

さあ、誰でしょう？！

GM サレム・サレー

中東を代表するトッププレーヤーであり、アジア圏でも屈指の攻撃的なファイター。UAEのナンバー1で、国際大会でも幾度も印象的な勝ち星を挙げてきた実力者です。2015年のアジア選手権（クラシカル／ブリッツ）で2冠を達成し、ピークレーティングは2690（2021年）で当時の世界ランキング44位。　大胆な決断力と、恐れを見せないアタッキングスタイルは世界的にも知られています。そして、私が最も強く感じたのは、**「自分とプレースタイルが似ている」**ということでした。もちろん、現時点ではすべての面で彼のほうが完成されていて、経験・実績・精度でも上回っています。それでも、似たタイプだからこそ、彼の強さと弱点の両方が感覚的に理解できる気がしました。私はすぐに研究を開始しました。

サレムは準備されたオープニングを深く理解しており、得意形は明確です。

シシリアン・ナイドルフ、キングス・インディアン・ディフェンス、クイーンズ・ギャンビット、そのどれもが攻撃的で複雑な戦いに持ち込むための武器になっています。局面を単純化することは少なく、駒をサクリファイスし主導権を握りにいくタイプ。簡単に駒を交換してイコールを目指す展開はほとんど選びません。

象徴的だったのは、2024年のフェドセーエフ戦。

クイーンとルークを犠牲にしてキングを仕留め切った、あの鮮烈な一局。

彼が「安全よりも勝ちを選ぶ」プレーヤーであることを強く印象づけました。しかし、私はそこに可能性を見出しました。

攻撃的であるということは、裏を返せば**リスクを負う**ということでもある。もしこちらが準備し尽くしたラインで勝負できれば、チャンスは必ずあると感じました。そこで、私が立てた戦略はシンプルでした。

白番では勝ちを狙いに行く

→正面からナイドルフに踏み込む

黒番ではしっかり受けてドローに寄せる

→ニムゾ・インディアンでソリッドに構える

もしクラシカルで勝負がつかなければタイブレークに突入しますが、できればそこで決めたくありませんでした。サレムは早指しにも強く、タイブレークに持ち込まれれば分が悪い。だからこそ、クラシカルで勝負を決めにいく、それが最も現実的な勝ち筋でした。

準備の方向性は完全に固まり、あとは深掘りするだけでした。ワールドカップまで残り4週間。

相手は強い。しかし、勝つチャンスはある。

そう確信しながら、私は静かに準備を積み上げていきました。

大会の直前、私はベトナムの実家に数日間戻る機会があり、そこでも準備を続けていました。そこでふと気づいたのは、**私がチェスを始めた30年前とまったく同じ机で、再びチェスの勉強をしていた**ということでした。目の前には、子どもの頃から積み重ねてきたトロフィーやメダルが並んだショーケース。それを眺めながら研究していると、これまでのチェス人生の一瞬一瞬が鮮明に蘇り、胸が熱くなりました。思わず涙がこぼれそうになるほどでした。

すべてはここから始まった。
そして、まだ終わっていない。

そう強く感じました。初心を思い出し、覚悟が深まり、心が再び燃え上がった瞬間でした。もっと強くなりたい。もっと先へ行きたい。その気持ちはこれまで以上に明確でした。**まずは、このワールドカップに、すべてを捧げる。**そう心の中でそっと思いながら、私はゴアへ向かいました。

ゴア到着

ついにゴアへ到着しました。空港では、アジアのレジェンドであるユージン・トーレ氏と偶然お会いし、短いながらも温かい会話を交わすことができました。今回は出場ではなく、GMダニエル・キゾンの帯同として来られているとのことでした。長年アジアのチェスを支えてきた大先輩と世界大会の地で再会できたことが、なんだか不思議で嬉しい気持ちでした。

インドの大会運営のホスピタリティは、やはりいつも素晴らしいです。空港で迎えていただき、そのままホテルに向かいました。ゴアは活気ある海沿いの街として知られていますが、大会会場周辺は落ち着いた静かなエリアで、集中するには理想的な環境でした。

翌日は開会式でしたが、私は参加しない選択をしました。大規模な式典はエネルギーを消耗します。大会が始まるまでは少しでも多くの時間を準備に使いたいと思い、ホテルに残ってレパートリーを復習しました。

夜にはテクニカルミーティングに出席しました。ラウンド1に出場する多くの選手が集まっており、会場の空気が一気に「戦いの場」へと変わっていくのを感じました。上位シードの選手たちはまだ到着していなかったようです。そこでGMポール・ヴェルタン（9月のジャパンオープンに出場）と再会し少し言葉を交わしました。さらに、ベトナムの仲間であるGMレ・クアン・リエムとも会うことができ、ChessBase Indiaの取材も受けました。そして初めてプレー会場に足を運び、盤面の感触・照明

・椅子の高さ・空調といった細かい部分を確かめました。とてもきれいな会場で、気持ちよく対局に集中できそうだと感じました。

その後、色の抽選結果が発表されました。私は第1局で白番となりました。つまり、計画通り「初手から勝ちを狙いに行く」という展開です。

ゴアの夜は思ったより暗く、静かでした。ふとした瞬間、胸が少し締め付けられるような「孤独」を感じました。オリンピアードのようにチームメイトやコーチがいるわけでもなく、今回はセコンドも帯同者もいません。この環境には慣れているはずなのに、時々ふと心に影が差す瞬間があります。しかし、その感情に浸っている時間はありませんでした。もうすぐ世界最高峰の舞台で戦う時が来る。今はただ、準備に集中するのみ。そうして、静かな夜の中、私は翌日の対局に向けて最後のチェックを重ねました。

そして、第1局が幕を開けました。

第1局

Tran, Thanh Tu (2407)
Salem, A.R. Saleh (2620)
FIDE World Cup 2025 Goa (1)
Sicilian Defense B81

1.e4 c5 2.Nf3 d6 3.d4 cxd4 4.Nxd4 Nf6 5.Nc3 a6 6.h3 e6 7.g4 ここまではほぼ準備通りの進行です。すべての変化を完全にカバーできていたわけではありませんでしたが、この局面については十分理解していたため、自信を持って指し進めていました。

7...Be7 8.g5 Nfd7 9.Bg2 私のデータベースによると、サレムはこの手に過去一度も直面したことがなく、6.h3の最新対局も2022年まで遡ります。それでも、長年のナイドルフ使いである彼なら、重要な細部は当然把握しているはずです。この局面に対して彼の典型的な1手は 9...b5 で、私はその変化に対していくつか事前に対策を準備していました。

9...Nc6 9...Bxg5? 10.Nxe6 fxe6 11.Qh5+ g6 12.Qxg5±; 9...b5 10.Nf5! exf5 11.exf5 Nb6 (11...Ra7? 12.Qd4 Rc7 13.Qxg7 Rf8 14.Be3+– 黒のポジションは非常に窮屈で、かなり苦しい状況になります。) 12.Be3 N8d7 13.Qd4 0–0 14.f6 gxf6 15.Bxa8 Nxa8 16.Nd5 Nc7 17.Rg1 Kh8 18.Nxe7 Qxe7 19.0–0–0 Qe5 20.Qxd6 Qxd6 21.Rxd6 Ne6 22.Rgd1 Ne5 23.gxf6 Nc4 24.R6d5 Nxe3 25.fxe3 h6 26.h4 Rg8 27.b3 Kh7 28.Rd6= 白はここでドローを目指して指すことも簡単にできます。

10.h4 0-0 11.b3 ここまでも彼はほぼノータイムで指し続けており、一方私はすでに10分ほど消費していました。事前に準備してきたラインであったことを考えると、この時点での時間の使い方は理想的とは言えませんでした。とはいえ、この11.b3はサレムにとっては意外だったようで少し考えさせることができました。アイデアとしては、将来的にビショップをb2へフィアンケットし、キングサイドでの攻撃力を強める狙いがあります。

11...Re8 ここでサレムは初めて長考に入り、わずかに不正確な手を選びました。ただし、私の準備の想定外でもあったため、この局面は私の時間管理にも影響しました。実際、次の「一般的な駒展開の1手」に20分以上も費やしてしまいました。

12.Bb2± Bf8 13.Qd2 はわずかに不正確です。というのも、このあといずれ黒は Nxd4 と取ってくるため、最終的にはクイーンでd4を取り返すことになります。つまり、d2を経由することで1手無駄（テンポ損）をしている形になってしまいます。

13.f4 Nxd4 (13...d5 14.e5 Qc7 15.Rh3 Nxd4 16.Qxd4 b5 17.0–0–0 Bb7 18.h5± キングサイドで典型的な攻めが続きます) 14.Qxd4 e5 15.Qf2 exf4 16.Qxf4 このとき、キングがまだセンターに残っており、黒のルークがすでにe8にいることが少し気になりましたが、実際には白は次の手でロングキャスリングしてしまえばよく、客観的にはまったく危険はありません。
16...Ne5 17.0–0–0+–

13...Nxd4 14.Qxd4 b5 15.0-0-0 Bb7 16.Kb1 Rc8 17.f4 ここまでは双方自然な手順で進んでおり、局面としても不自然なところはありません。しかし私はこの時点ですでにかなりの時間を消費しており、時計では約40分のビハインドとなっていました。この時点でのタイムマネジメントの差は、後の展開に重く響くことになります。

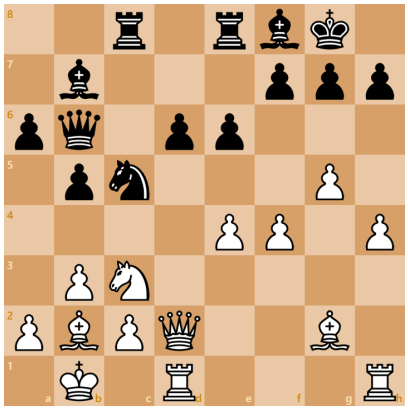
17.Qd2 クイーンでg5を守りつつ、h5の準備もします。興味深いことに、エンジンによれば白のキングサイド攻撃にはf4のポーンは必須ではなく、このポーンがなくてもキングサイドの攻めは十分成立するようです。 17...Nc5 18.a3 Qb6 19.h5 a5 20.h6 b4 21.axb4 Qxb4 (21...axb4 22.Nd5! Bxd5 (22...exd5 23.hxg7 Bxg7 24.Bxg7 Kxg7 25.Qd4+ Kg8 (25...Re5 26.f4+–) 26.Rxh7! Re5 27.Rdh1 Na4 28.Qxb6 Nxb6 29.f4 Rxe4 (29...Ree8 30.f5 Kf8 31.f6 Kg8 32.Rh8#) 30.Bxe4 dxe4 31.f5 Kf8 32.f6 Ke8 33.g6+– パスポーンが勝敗を決めるでしょう) 23.exd5 e5 24.Rh4+– 白はb4を狙っており、黒はクイーンサイドでカウンタープレーを作るには間に合いません。一方で白のキングサイド攻撃は依然として非常に危険です。) 22.Qe3 g6 23.Rd4 Qb6 24.Rhd1 e5 25.Rc4 a4 26.Nxa4 Nxa4 27.Rxa4 Qxe3 28.fxe3 Ra8 29.Rxa8 Rxa8 30.c4± 白はポーン1つ得をしており、このエンドゲームでは非常に良い勝ちのチャンスがあります。

17...Qb6 18.Qd2 ここが、この対局、そしてこのマッチ全体における最初の「クイーン交換を拒否した場面」でした。振り返ってみると、この判断はすべて誤りでした。当時の私はキングサイドでの攻撃に強く手応えを感じており、勝ちを狙う方針でクイーンを盤上に残す選択をしていました。とはいえ、客観的にはここで一度落ち着いて局面を整理すべきで、攻めの継続に固執してしまったことが、結果として流れを悪くする一因になりました。

18.Qxb6 Nxb6 19.a3 d5 ここで黒は反撃を見つける必要があります。そうしないと、白はポーン構造が良くキングサイドのスペースも広いため、白側から指すのがずっと簡単なポジションになります。20.Rd3 dxe4 21.Nxe4 Nd5 22.Rg3 Ba8 (22...Nxf4? 23.Nf6+ gxf6 24.gxf6+ Kh8 25.Bxb7+–) 23.Rf1 Red8 24.h5± h6の脅威があり、クイーンがいなくても非常に強力な攻めを維持できます。

Photo by Shahid Ahmed

18...Nc5



19.f5 19.h5 も別のポーンプッシュのアイデアです。 19...b4 20.Na4 Nxa4 21.bxa4 Bc6 もし黒が本譜のようなアイデアを続けるのであれば、次のポーンプッシュが非常に危険になってきます。 22.g6 Bxa4 23.Rc1 h6 (23...fxg6 24.hxg6 h6 25.f5+– f6または fxe6 のどちらも非常に強力な攻めになります) 24.gxf7+ Kxf7 25.Bh3± f5、f6 のアイデアがあり、白の攻めは黒よりかなり速いです。; 19.Rde1 19…b4 に 20.Nd1 で対応する狙い、あるいは 19.Qe3 も考慮に値します。こちらは 19…b4 に対して 20.Ne2 を準備する手です。どちらも十分有力な代案でした。

19...b4= 20.Na4 Nxa4 21.bxa4 Bc6? 21...exf5= の方が望ましく、イコールの局面に向かっていました。しかし当然のことながら、サレムはそれ以上を求めていましたし、私も同じでした。 22.exf5 Bxg2 23.Qxg2 Qc6 24.Rd5 局面はおおむねイコールですが、私はテンションを保ちつつ、キングサイドのポーンプッシュでチャンスをうかがうつもりでした。

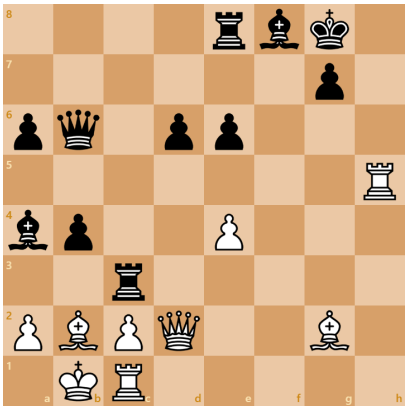
22.g6 この手は不正確でした。ただし盤上では非常に誘惑的で、実際に指したくなる手でした。

22.h5! この手も読んでいましたが、本譜の方があまりにも魅力的で興奮してしまいました。恐れたのは、「1手遅れてしまい、どこかでカウンターアタックを許してしまうのではないか」という点でした。こういったポーンストームでは、ファイルを開くなら通常はfファイルではなくhファイルであるべきです。次にg6と突き、hxg6と取れる形を狙うのが筋です。 22...Bxa4 23.Rc1 Rc7 (23...Rc3 24.g6 fxg6 25.hxg6 h6 26.fxe6+– e5に続き Bd5 を狙います) 24.g6 e5 25.gxf7+ (25.f6 というアイデアもあります) 25...Rxf7 26.h6 gxh6 27.Bf3→

22...fxg6 23.fxg6 Bxa4 24.Rc1 hxg6? ここでサレムはリスクを取りすぎました。今取るにせよ、前の手で取るにせよ、どちらのキャプチャーも最終的には負けにつながります。

⌓24...h6= 黒はここでキングサイドを閉じる必要がありますが、おそらくルークにfファイルを支配され、f7へ侵入される形を嫌がったのだと思います。 25.Rhf1 Rc7 26.Rf3 Qc5 27.Qf4 Qh5 28.Qg3 Qc5=

25.h5+- gxh5 26.Rxh5 Rc3 このアイデアは対局中にすでに見えており、いずれ指してくるだろうと予想していました。しかし彼は直ちに指してきました。実戦的には非常に優れた選択です。この時点で私の持ち時間は残り8分、サレムは18分。さらに40手目まであと14手指さなければ追加時間は入りません。こちらの攻撃は非常に有望に見えていましたが、この「嫌らしいアイデア」をこのタイミングで突きつけられたことで、さらに時間を消費してしまいました。



27.Qg5? ここでの私の考えは「ほかの要素をすべて無視して、Qg6・Rch1・Rh8# と進めてチェックメイトを狙いにいく」というものでした。クイーンをキングの近くに配置することで、攻撃がより強力に見えるという感覚もありました。

27.Bh3!+– この手は最後に残っていた未投入の駒を活躍させる手で、e6のポーンを守る役目を負わせることでe8のルークをc8へ回れなくし、同時にc2を攻撃することもできなくなります。この手と本譜の手のどちらにするか悩みましたが、そのときはQg5の方が強いと判断していました。恐れたのはQe3で、そこでクイーン交換を強制される展開を恐れていました。 27...Qe3 28.Bxc3 でも、こちらは単純にルークを取ることができます 28...Qxc3 29.Qg2+–

27...Qe3 ここでも再びクイーン交換を提案されました。

27...Rxc2= この手は強制ドローに向かうルートです。ただし、サレム相手にはその心配をする必要はありません。彼はこういったドローの順を選ばないタイプだからです。 28.Rxc2 Bxc2+ 29.Kxc2 Qf2+ 30.Kb1 Rc8 31.Rh8+ Kxh8 32.Qh6+ Kg8 33.Qxe6+ Kh7 34.Qh3+ Kg8 35.Qe6+=

28.Qh4?? ここでも私はクイーン交換を拒否しました。ただ単に交換したくなかったのです。しかし残り時間はわずか4分。この局面でそれは大きすぎるリスクでした。そして実際、この判断が敗因となりました。

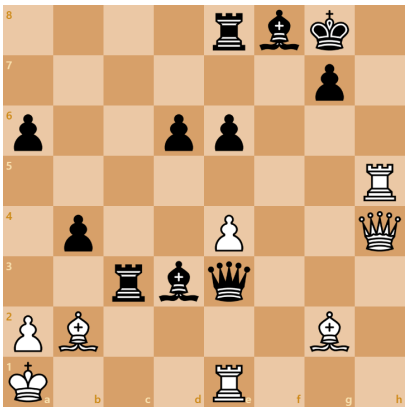
28.Bxc3 ここはクイーン交換を受け入れるべきでした。 28...Qxg5 29.Rxg5 bxc3 30.Ra5 Rb8+ 31.Ka1 Bb5 32.a4 Bc4 33.Bf1 Bxf1 34.Rxf1 Rb6 35.Rb1 Rc6 36.Rb8 Kf7 37.Ra8+– a6のポーンはいずれ落ち、白はほぼ勝勢になります。;28.Qg6は上手くいきません。理由は、次の手順があるからです。 28...Rxc2 29.Rxc2 Bxc2+ 30.Kxc2 Qe2+ 31.Kb1 Qd3+–+

28...Bxc2+!-+ ここからは完全にサレムの流れになりました。主導権を握った彼は一気にギアを上げ、まるで「スイッチが入った」かのように、すべての手を自信と正確さをもって指してきました。

29.Ka1 Bd3! この手は非常に重要で、黒は f1 のマスをコントロールしている必要があります。

29...Bxe4 30.Rf1 Bf5 31.Rhxf5 Rec8 32.Qh1+–

30.Re1 28.Qh4を指した時点で、私はこの局面まで読んでいました。クイーンを攻撃することでテンポを稼ぎ、こちらの攻撃を継続できると考えていました。



30...Rec8!! 彼はこの手をほとんどノータイムで指し、私は完全にショックを受けました。Rc8 でバックランクメイトを狙うアイデアそのものは一部の変化で見えていましたが、この局面でもクイーンをサクリファイスして同じテーマが成立するということを完全に失念していました。

31.Rh8+ この時点で局面は完全に絶望的でした。パーペチュアルチェックがなく、引き分けに持ち込む筋が残っていませんでした。

⌓31.Qh1 この手で多少は粘ることができ、黒もまだ正確さが求められます。 31...Qf2 唯一の手です (31...Qd2? 32.e5 Kf7 (32...dxe5 33.Bd5! Qxe1+ 34.Qxe1 exd5 35.Bxc3 Rxc3 36.Rxe5 Be4 37.Kb2=) 33.Bd5! exd5 (33...R8c5 はここではうまくいきません。 34.exd6 exd5 35.Qf3+ Kg8 36.Rh8+ Kxh8 37.Qxf8+ Kh7 38.Rh1+ Kg6 39.Rg1++–) 34.Qxd5+ Ke8 35.Rhh1 Kd7 36.e6+ Ke7 37.Qf3 Bg6 38.Qg4 Bd3 39.Qf3=) 32.e5 Kf7 33.Bd5 R8c5 34.exd6 exd5 f2のクイーンがf3のマスを守っているおかげで、黒はこの手を指すことができます。 35.d7 Be7–+; 31.Rxe3? Rc1+ 32.Bxc1 Rxc1+ 33.Kb2 Rb1#

31...Kf7 32.Bxc3 Rxc3 33.Qh5+ Ke7 34.Qh4+ Kd7 35.Qh1 Rc1+ 0-1

第1局を終えて会場を出たとき、私の中には悔しさと信じられない気持ちが入り混じっていました。深い準備、理想的な展開、勢いをつかんだ攻撃、まさに望んでいた形を盤上に築きながら、それを自分の手で逃してしまったのです。問題は準備でも作戦でもありませんでした。最大の問題はタイムマネジメントでした。

序盤で時間を使いすぎたことで、勝負所が訪れた時に十分な時間を残せませんでした。時間に追われる中で、本来なら冷静に読むべきところを感情が上回ってしまいました。局面が要求していたからではなく、「勝ちたい」という思いが強すぎたがゆえにクイーン交換を拒み続け、その焦りが時間の短さとともに焦燥に変わっていきました。そしてサレムは、世界トップクラスの精度でその隙を逃しませんでした。

しかし、落ち込みの中にもひとつだけ確かな収穫がありました。

「サレム相手に、自分は十分に主導権を握れる」

それだけで、再び気持ちに火がつきました。勝負はまだ終わっていません。気持ちを立て直し、頭を切り替え、第2局に向けて準備する

しかありませんでした。
　第2局に臨む状況はとてもシンプルでした。

黒番で勝たなければならない乾坤一擲の勝負。

つまり、当初の「堅実に指して安全なドローに持ち込む」というプランは完全に意味を失いました。引き分けでは足りません。そこで、アプローチを変える必要がありました。冷静でソリッドな展開を狙うために予定していたニムゾ・インディアンは、もはやこの状況には合いません。代わりに選んだのはキングス・インディアン。どれほど強い相手でも勝ち筋を残し続けられる、戦うためのオープニングです。
　もちろん、リスクもありました。サレム自身、黒番では長年キングス・インディアンを愛用してきたスペシャリストです。白番でも対策を熟知しているのは間違いありません。本来なら、スペシャリストにその得意分野をぶつけるのは避けたいところですが、ここは完璧な条件が揃った理想の世界ではありません。欲しかったのはただひとつ、互いにチャンスが残り、鋭い勝負になる局面です。そこに持ち込むことさえできれば、私は戦えます。そう信じて、第2局の席に向かいました。

第2局

Salem, A.R. Saleh (2620)
Tran, Thanh Tu (2407)
FIDE World Cup 2025 Goa (1)
King's Indian Defense E62

1.d4 Nf6 2.c4 g6 3.g3 Bg7 4.Bg2 サレムはフィアンケット・バリエーションを選びました。正直に言うと、このラインはあまり想定しておらず準備時間も多く割いていませんでした。ノックアウト方式の大会で白番が引き分けで十分な場面では、不要なリスクを避け、堅実で柔軟なフィアンケット構えを採用するのは非常にプロフェッショナルな選択です。この形は最前線の理論戦を避け、黒側の勝ち筋を限定する狙いがあります。

4...0-0 5.Nc3 d6 6.Nf3 Nc6 7.d5 Na5 8.b3 c5 9.Bb2 a6 10.0-0 Bf5 ここでは Qd7 に続いて Bh3 と展開し、勝負できる局面を作る構想でした。

10...Rb8　の方がこの局面では指されることが多いです。　11.Nd2　b5　12.Qc2　bxc4　13.bxc4　Bh6　14.Ncb1

e5 15.Bc3±

11.Nd2 Qd7 12.e4 Bh3 13.a4 h5 14.Qc2 h4 15.Rae1 Rab8 キングサイドでは可能な限りのことを行い、ポーンを h4 まで押し上げました。しかし、そこから有効手が途切れてしまいました。ここでプランを切り替え、クイーンサイドにもプレッシャーをかける展開に移る必要がありました。

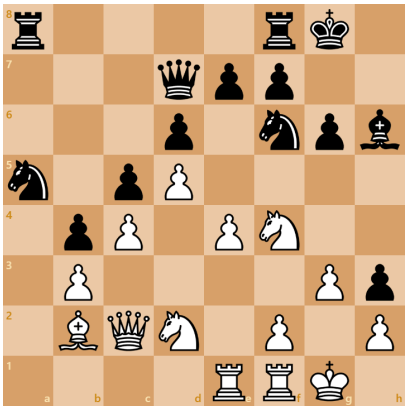
16.Ne2 この手は予想外でした。なぜなら黒は1手で b5 を突けるようになったためです。

16...Bxg2 17.Kxg2 h3+ 18.Kg1 b5 19.axb5 サレムは私に希望を与え続けました。まさにこちらが狙っていた展開そのものです。

19.Bc3 bxc4 この手も読みに入れていましたが、おそらくうまくいきませんでした。 20.bxc4 (20.Bxa5 cxb3 21.Qc4 (21.Nxb3? Qxa4 22.Rb1 Nxe4∓) 21...Ng4 22.Bc3 Bxc3 23.Nxc3 Ne5 24.Qe2 c4 25.Nxc4 黒は得をしません) 20...Rb4 21.Bxb4 cxb4 で白に多少の問題は生じますが、有望とは思えませんでした。

19...axb5 20.Bc3 Ra8 21.Nf4 b4 b3 の弱点を固定

22.Bb2 Bh6 ここで突然、私の局面は非常に魅力的に見え始めました。h3 のポーンの存在によりキングサイドでメイト筋を作り出すことができ、クイーンサイドではポーンが前進し、ルークも a ファイルで活動的です。a5 のナイトは b3 を圧迫し、場合によっては b7–d6 経由で理想的なルートをたどる可能性もあります。サレム側は客観的にはまだコントロールしていましたが、明快なプランを見つけるのは簡単ではありませんでした。対局後に彼と分析した際、本人でさえ「どこで悪くなったのか正確には分からない」と話していました。



23.e5 23.f3 Bxf4 24.gxf4 の方が有利に戦えましたが、ダブルポーンと崩れたキングサイドを自分から許す手を指せる人がどれほどいるでしょうか。

23...dxe5 24.Bxe5 Nb7 25.f3 Nd6 26.g4 h3 のポーンを取りに来ましたが、この局面は戦術が絡み合っており、正確な読みが必須です。引き分けで十分な試合状況を考えると、最善の実戦的選択とは言えなかったかもしれません。対局後、彼自身も「この判断で局面を必要以上に複雑にしてしまった」と認めていました。一方で私は再び時間に追われており、残りは 12 分、彼は 30 分ほど残していました。

26...Ra5 26...Nxg4? はこのタイミングではうまくいきません。 27.fxg4 Qxg4+ 28.Kh1 Bxf4 29.Rg1 Qh5 30.Bxf4+–

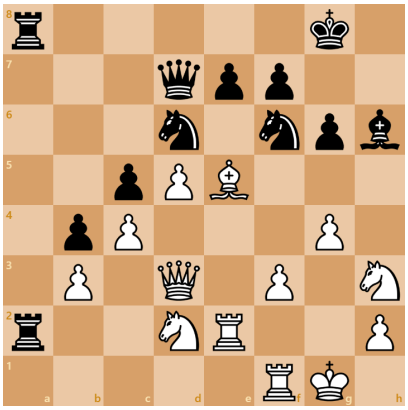
27.Re2 Rfa8 勝負にいくしかありません。

27...Bxf4 28.Bxf4 Nxg4 29.Bxd6 exd6 30.Ne4 f5 31.fxg4 fxe4 32.Rxf8+ Kxf8 33.Qxe4= Ra1+ 34.Kf2 Qf7+ 35.Qf3 Qxf3+ (35...Rf1+? 36.Kxf1 Qxf3+ 37.Rf2+– h3 のポーンが落ちて白が勝勢) 36.Kxf3 Rg1 37.Re3 Rg2 38.Re2 Rg1= 引き分けにしかなりません。; 27...Nxg4 28.fxg4 Qxg4+ 29.Kh1 Bxf4 30.Rg1 Qh5 31.Bxf4 Qxe2 32.Rxg6+ fxg6 33.Qxg6+ Kh8 34.Qh6+ Kg8 35.Qg6+=

28.Nxh3? そしてついに、すべての努力が実り、彼が決定的なミスを犯しました。

28.Qd3± Ra2 29.Kh1 ここで h3 のポーンを取る必要はまったくなく、取らなければ依然として白の方がゲームをコントロールしていました。

28...Ra2-+ 29.Qd3



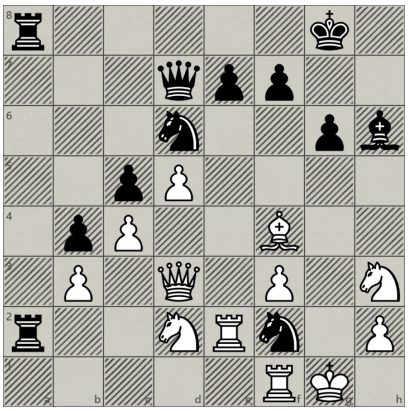
29...Nxg4! 私の対局をよく追ってくださっている方なら、どこかで見覚えのあるテーマかもしれません。2024年のブダペスト・オリンピアードでの GM アダム・コザック戦でも、g4 に駒を捨てて複雑な

局面を制し、重要な勝利を挙げました。この1手を指した瞬間、その良い記憶が一気に蘇り、自信が湧いてきました。ただし大きな違いがひとつありました。あの時コザックも深刻な時間切迫でしたが、今回はサレムが 13 分残しており、私の残り時間はわずか 4 分しかありませんでした。

30.Bf4 これは、世界トップクラスの GM と戦うとはどういうことなのかを示す場面でした。彼は局面のテンションを保ち続け、「次はどう指す？」と問いかけ続け、私の残り時間がどんどん減っていく中で、厳しい選択を迫ってきました。

30.fxg4 Qxg4+ 31.Kh1 (31.Rg2 Qxg2+ 32.Kxg2 Rxd2+ 33.Qxd2 Bxd2–+) 31...Bxd2 32.Rxd2 Rxd2 33.Qxd2 Qe4+ 34.Kg1 Qxe5–+

30...Bxf4 ⩲30...Ne5! 対局後、GM レ・クアン・リエムがこのアイデアを指摘してくれました。Ne5 でも Nf2 でも成立し、その狙いは、白がナイトを取れば黒がナイトを取り返し、白は黒マスビショップを交換せざるを得なくなるというものです。そうしないと、h6–c1 のダイアゴナルに乗った黒のビショップが強力すぎるからです。白のポーン構造はすでに非常に悪く、ナイトとビショップが交換されれば、黒ナイトは d6 から f5 に理想的に落ち着き、黒の駒が一気に活性化します。 31.Bxe5 (31.Rxe5 Qxh3 32.Bxh6 Qxh6 33.Re2 Nf5–+; 31.Qe3 Qxh3 32.Bxh6 Nf5 33.Qxe5 Qxh6–+) 31...Qxh3 32.Bxd6 exd6 33.Ne4 Bf4–+; 30...Nf2!! を指していれば、まさに『ムーブ・オブ・ザ・デイ』になり得た1手でした。ナイトは白の 4 つの駒で取ることができますが、それでも黒は既に戦略的に勝勢なのです。



31.Nxf4 Nf6 32.Kh1 Nf5 この時点でも、私はまだ勝ち筋があることを分かっていました。しかしここで選択を迫られます。クイーンを盤上に残して攻め続けるのか、それとも優勢なエンドゲームに入るために交換するのか。「キングを攻めている」「この勝負に勝たなければならない」という思い込みが判断を歪め、この試合で何度も犯

Photo - (C) 2025 FIDE, Michal Walusza.

してきたのと同じ誤り、クイーントレード避けることを再び選んでしまいました。

32...Qf5 33.Qxf5 (33.Qe3 Qg5 34.Rg1 Qh6 白には有効な手段がなく、最終的にはクイーントレードを受け入れざるを得ません) 33...Nxf5 34.Nd3 Nd7–+ 黒の駒は非常に活動的で、白側には弱点が多すぎます。R8a3、Nd4 が大きな脅威であり、またはRc2 、R8a2 も非常に強力です。

33.Ne4 Nxe4 この手で優勢を逃しました。というのも、この交換によって白はポーン構造を修復でき、e4–e5 が自然に実現してしまうからです。

33...Kg7 34.Rg1 (34.Nxc5? Qd6–+; 34.Nxf6 exf6 35.Rg1 Ra1–+) 34...Ra1 35.Ree1 Rxe1 36.Rxe1 Ra2–+

34.fxe4∓ Nd4 35.Rxa2 Rxa2 局面自体はまだ良好でしたし、あと 5 手指せば 40 手目に到達して持ち時間が 30 分加算されます。そこまで行けば、勝ち筋をじっくり探す時間は十分にありました。

36.e5?! ここでもサレムは非常に直接的かつ実戦的な選択をしました。客観的には悪手で、黒のクイーンが g4 に出るルートを許してしまうのですが、e6→d6 のアイデアは時間の無い側にとって対処が極めて難しい筋です。私の残り時間は 2 分しかなく、この局面に立ち向かうにはあまりにも厳しい状況でした。

36...Qg4 37.e6 f5? そしてここでも、私はこのマッチを通して繰り返してきた誤り、クイーン交換を避けてしまう、という同じミスを犯してしまいました。

⌓37...fxe6 38.Qxg6+ (38.dxe6 Kh7 39.Qh3+ Qxh3 40.Nxh3 Rb2 41.Rf7+ Kg8 42.Ng1 Rxb3 43.Rxe7 Rc3–+) 38...Qxg6 39.Nxg6 exd5 40.Nxe7+ Kg7 41.cxd5 (41.Nxd5 Nxb3–+) 41...Nxb3 42.Nf5+ Kh8 43.d6 Rd2–+

38.d6= exd6 39.Qe3 Kf8? タイムコントロール直前にミスをしてしまいました。ただし正直に言うと、その前の時点ですでに勝ちのチャンスはかなり薄くなっていました。

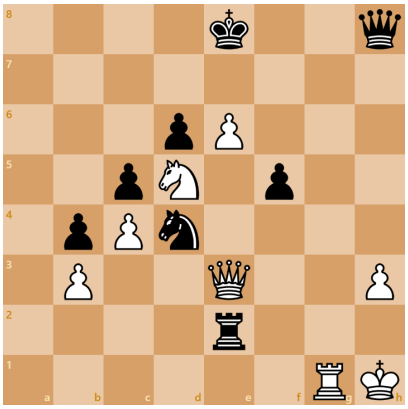
39...Qh4= 30秒しか残っていない実戦でこの手を見つけるのはほぼ不可能です。 40.h3 Ra8 41.e7 Kf7 42.Nxg6 Qf6 43.Rg1 Qe6 44.Qh6 Qe4+ 45.Rg2 Qe1+ 46.Rg1 Qe4+ 47.Rg2=

40.h3□+- この唯一の1手が非常に強力で、しかもサレムはちょうど時間切迫を抜けたタイミングでこの手を見つけました。この1手がなければ、こちらにもまだ勝ちを狙える余地が残っていたはずです。

40.e7+ Ke8 41.h3 Qg5 42.Rg1 Qxe7–+; 40.Rg1 Nf3–+

40...Qg5 タイムトラブルを何とか耐え、40手目に到達して30分加算されたにもかかわらず、そのとき盤上にあったのはすでに負けのポジション。非常に苦い展開でした。

41.Rg1 Qf6 42.Nxg6+ Ke8 43.Nf4 Qh8 44.Nd5 Re2



45.Ra1! そして第1局と同じように、この対局もクイーンサクリファイスで幕を閉じることになりました。

45...Nxe6 46.Ra8+ Kd7 47.Rxh8 Rxe3 48.Nxe3 Nd4 49.h4 f4 50.Nd5 f3 51.Rf8 Nxb3 52.h5
1-0

それでも、炎は残った

対局がすべて終わり、勝負が手の中からこぼれ落ちたとき、現実は評価値以上の重さで胸に突き刺さりました。握手を交わし、席を立ちながら思ったのは、「2600の相手を2度も上回りながら、それでも勝ち切れなかった」という事実でした。痛みの理由は、悪いチェスを指したからではありません。**勝てる内容を示しながら、結果としてゼロになってしまったこと**、その悔しさでした。

しかし、その深い失望の奥には、もうひとつ強く燃える感情がありました。

私は、恐れていなかった。
レーティングでも、名前でも、舞台の大きさでも。
日本代表として、「戦いに来た」という姿勢で盤に向かえた。それだけは揺るぎない誇りでした。

今回の敗戦で、足りないものがはっきりと見えました。とくに**時間管理と優勢を勝ちに結びつける技術**。この2つを磨くことができれば、あの舞台で勝ち切れる力は確かに自分の中にあると感じています。だからこそ、課題から目をそらさず、必ず改善し、次こそ勝ち切れる選手へ成長します。

世界の舞台に日本代表として立てることは、決して当たり前ではありません。だからこそ、私はまた戻ってきます。今度は「そこに立つ資格があるか」を確かめるためではなく、**「そこに立つべき存在だ」と証明するために**。捲土重来の思いを胸に、私は前へ進みます。

試合は終わりました。
しかし、炎は消えていません。

最後になりますが、応援してくださった皆さま、挑戦の機会を与えてくださった日本チェス連盟、そしてオリンピアードのチームメンバーに、心より感謝申し上げます。皆さまの支えがあるからこそ、私は世界の舞台に立ち続けることができます。

普段の練習を
本番と同じ駒、同じ盤で

モダン・スタントン 96mm ヘビー

プラスチック製
駒のみ

¥3,980

Yahoo!ショップ
Amazon.co.jp

オフィシャル・スタントン 95mm

木製
駒のみ

¥14,800

Yahoo!ショップ
Amazon.co.jp

トーナメント 51cm 57mm

ビニール製
盤のみ

¥2,680

Yahoo!ショップ
Amazon.co.jp

モダン・トーナメント 44cm ヘビー

プラスチック製
盤と駒のセット

¥5,480

Yahoo!ショップ
Amazon.co.jp

他にもたくさんのチェス用品を取り揃えております
チェス用品のご購入は

CHESS JAPAN
GAME AND ART

Yahoo!ショップ：https://store.shopping.yahoo.co.jp/chessjapan/
公式HP：https://www.chessjapan.com/
※価格は掲載時点のものです。

連載

名プレーヤーから学ぼう
Learn From Legends

vol.15 Garry Kasparov

【文】山田 弘平（やまだ こうへい）
1988年北海道生まれ。FIDEマスター/FIDEインストラクター。国内大会の優勝、日本代表経験あり。日本初のスポンサードプレーヤーとして活動する一方、オンライン講座で普及活動も行っている。

Garry Kasparov（ガリー・カスパロフ, 1963 - ）

ロシア出身の第13代世界チャンピオン。複雑なポジションを正確に読む力を持ち、その能力を活かした攻撃的なスタイルを武器に、22歳で世界チャンピオンとなった。

引退するまでトッププレーヤーの地位を守り続け、Carlsen登場以前では、史上最強プレーヤーとみなされている。チェスコンピュータとの関わりも深く、1997年、IBMが作ったDeep Blueとのマッチに敗れ、史上初めてコンピュータに敗れた世界チャンピオンとなった。その一方で、コンピュータによるチェス研究を積極的に行い、チェスエンジンによるオープニング研究の先駆者としても知られている。

Garry Kasparov（Wikipediaより）

今回は第13代の世界チャンピオン、Garry　Kasparovを紹介します。Kasparovの業績すべてについて語るには紙面が足りないので、今回は世界選手権屈指の名勝負、1984/1985年のKarpovとのマッチを取り上げます。この通称「ＫＫマッチ」を通して、Kasparovがどのように成長していったかを学んでいきましょう。

Kasparovは1963年、ソビエト連邦のバクー（現在のアゼルバイジャンの首都）で生まれました。チェスの才能に恵まれたKasparovは、10歳の頃にBotvinnikのチェススクールに入学しました。

BotvinnikはすぐにKasparovの才能に気づいたといいます。特に読みの能力は群をぬいており、BotvinnikやMakogonov、Nikitin、Shakarovといった一流の指導者たちに鍛えられた少年は、すぐに「将来の世界チャンピオン」と言われるようになりました。

若き天才は、まさに昇竜の勢いでトップマスターへの道を歩みます。1978年、15歳のときに国際大会で並み居るマスターを抑えて優勝。16歳の年に初めてついた国際レーティングは2545で、世界ランキング40位でした。1980年には世界ジュニアで優勝し、オリンピアードのソ連チームに選ばれ、GMとなりました。

ところが、若きKasparovの活躍をソ連チェス界は手放しで喜んではいませんでした。当時、ソ連チェス界の象徴は、世界チャンピオンKarpovだったためです。Fischerから王座を取り戻し、再び栄光の時代を作ったKarpovの地位と権力はとても大きく、ソ連チェス界はKarpovの長期政権を築くことに腐心していたのです。

KasparovとKarpovの初めての公式戦は、1981年に行われたソ連国内のチームイベントでした。最盛期のチャンピオンを相手に、18歳のKasparovは互角以上の戦いを繰り広げます。Karpovのわずかな油断を突き、チャンスも作りましたが結局は2ドローという結果に終わりました。

この対戦の後、KarpovはKasparovを「自分の王座を奪いかねない相手」と認識します。以降、二人が同じトーナメントに出ることはなくなり、Kasparovには不可解な「命令」が下るようになりました。

1982年、ヨーロッパのトップトーナメントに遠征する計画をしていたKasparovは、突然ソ連スポーツ委員会から「代わりにより レベルの低いトーナメントへの出場するよう打診」されたといいます。Nikitinも後に「Karpovのラ

イバルになりそうなKasparovの競技成績向上を阻止しようとする動きがあった」と述べています。

チェスで壁に当たることはほとんどなかったKasparovですが、政治的な「見えない壁」を感じる瞬間は多々あったようです。後に、Kasparovがソ連の旧体制やFIDEと衝突したのも、こういった経験をしたからかもしれません。

こういった問題を抱えながらも、Kasparovは勝ち続けます。1982年にはモスクワのインターゾーナルで圧勝し、Candidatesへの出場権を手にしました。しかし、Karpovへの挑戦をかけたこのCandidatesが、茨の道でした。

ノックアウト形式で行われた1983年のCandidates、Kasparovは初戦でBeliavskyを6-3で下します。しかし、準決勝のKortschnoj戦はプレーすることすらできず、中止になりました。FIDE会長Campomanesとソ連の間で起こった争いに巻き込まれ、一度は出場辞退を余儀なくされてしまったのです。

この騒動は大きな議論を呼びました。レーティングや勢いからいえば、Kasparovは挑戦者候補の筆頭でした。そのKasparovが戦うことなく敗退するのでは、競技としての公平性も疑われてしまうでしょう。

最終的にこの準決勝は1983年の冬に再実施されました。KasparovはKortschnojを7-4で破り、1984年の春に行われた決勝ではSmyslovを8.5-4.5で下しました。一度チェス盤の前に座れば、Kasparovは無類の強さで他の候補者を寄せ付けなかったのです。

1984年に行われたKarpovとの世界選手権は、ドローを数えず先に6勝したほうが勝利する、局数無制限のルールで行われました。この形式は1927年のCapablanca - Alekhineのマッチと同じ形式です。1927年のマッチは決着までに34試合かかり、史上最長のマッチとして記録されていました。

このマッチが、Kasparovにとってチェス人生で初めての大きな挫折でした。今まで簡単に相手を倒してきたKasparovは、格上の相手と戦うことに慣れておらず、世界選手権の重圧も加わりナーバスになっていたようです。

第1局、第2局は客観的に見て、Kasparovにチャンスのある展開でした。しかし第2局の白番では、主導権を握りながらも勝ちきることができませんでした。焦りを感じたKasparovは第3局でポーンを捨てる攻めを敢行するも、Karpovにいなされて敗北を喫してしまいます。

その後もアドバンテージを握っては手放す展開が続き、第6局を迎えました。

Kasparov, G (2710)
Karpov, A (2700)
World Championship 1984 (6)

Karpovのメインウェポン、Queen's Indian Defenseに対して積極的に対応し、Kasparovはアドバンテージを手にしました。1ポーン損ですが、パスポーンとピースのアクティビティで十分な代償があります。

27.Nc6? 27.Nf5! Bf8 28.d6! とパスポーンを活かして攻めれば、白が勝勢でした。次に29.Ne7+ Bxe7 30.dxe7 Re8 31.Bc6+- のような狙いがあります。

27...Bc5! ここでdポーンを動かせない(c6ナイトが不安定になる)のが、27.Nf5との違いです。

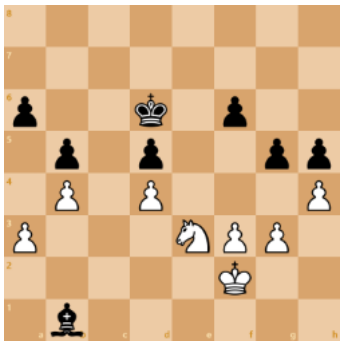
28.Bh3 Ra8! 29.Bd4 Bxd4 30.Nxd4 Kf8= Karpovの正確なディフェンスの前に、あっという間にアドバンテージは消え去り、1ポーンダウンのエンドゲームとなりました。実際にはドロー模様のポジションですが、勝ちを逃してパニックになったKasparovは、封じ手の直前に大きなミスを犯し、逆転負けを喫したのです。

この負けはKasparovの優勢を勝ち切る力や、ディフェンス力が、チャンピオンの水準には達していないことを物語っていました。Kasparovも後に「マッチの前半では私のプレーに明白な欠陥があった」と語っています。

動揺はさらなる崩壊を生みます。Kasparovは第7局でもKarpovのプレッシャーに耐えきれず、ディフェンスのミスで惨敗。あっという間にスコアは3-0となってしまいました。さらに、第9局でもKarpovはチャンピオンにふさわしいエンドゲームテクニックを見せます。

Karpov, A (2700)
Kasparov, G (2710)
World Championship 1984 (9)

ナイトvsビショップのエンドゲーム。ナイトの位置が良く黒のポーンを狙える白にややチャンスがありそうですが、どのように黒の陣地を突破していくか、一目ではわからないポジションです。



46...gxh4? これが白に突破口を与える大きなミスでした。46...Bg6±のようにじっと我慢しておけば、ドローを目指せたでしょう。

47.Ng2!! ポーンを取り返さずにナイトを引く、強烈な一手です。h4でポーンを取り返さないことで、g3-h4-h5が白キングの侵入経路になります。

47...hxg3+ 48.Kxg3 Ke6 49.Nf4+ Kf5 50.Nxh5 +− 白はポーンを取り返し、f6やd5が黒の負担になっています。結局このエンドゲームもKarpovが勝ち切って、スコアは4-0に広がりました。つまりKarpovの防衛まであと2勝となったのです。

追い込まれたKasparov陣営はマッチの戦略を変えざるを得ませんでした。第10局以降、Kasparovはとにかくリスクを排除し、これ以上負けないことを目指し始めたのです。それでもKarpovには何度かチャンスがありましたが、リスクを取る理由のないKarpovは深追いをせず、ドローが続きました。

この戦略は、局数無制限のマッチならではの戦略です。とにかく負けないことを目指す、というのは明らかにKasparovのスタイルではありませんでしたが、4-0の状況ではそれも仕方のないことでした。

しかし、この消極的な戦略を取ったことがKasparovにとって重要な転機となりました。ドローを重ねるなかでKasparovは、少しずつKarpovのスタイルを学び、吸収していったのです。スコアは動かないもののゲームの主導権は少しずつKasparovに移り始めました。

第27局、Karpovはついに決定的な勝利をあげました。駒を引くことで相手にプレッシャーをかけるKarpov特有のスタイルで、Kasparovのディフェンスをこじ開けたのです。スコアは5-0、防衛まであと1勝です。

しかし周囲の想像とは異なり、このときのKasparovは追い込まれていませんでした。崖っぷちに追い込まれたことで、Kasparovは本来自分がやるべき「ベストのチェスをする」姿勢に立ち戻ったのです。

逆に苦しんだのはKarpovでした。Fischerの引退により「不戦勝のチャンピオン」と言われてきたKarpovにとって、6-0勝利はぜひとも達成したい夢だったでしょう（FischerがTaimanovとLarsenを6-0で破ったことを思い出してください）。

しかし若き挑戦者の抵抗は少しずつ強さを増し、ついに第32局で結実したのです。

Kasparov, G (2710)
Karpov, A (2700)
World Championship 1984 (32)

1.d4 Nf6 2.c4 e6 3.Nf3 b6
Karpovの十八番、Queen's Indian Defenseです。Kasparovはこの選択をみて、今日はKarpovが勝ちにきたと感じていたようです。

4.Nc3 Bb7 5.a3 d5 6.cxd5 Nxd5

7.Qc2 Nd7?! やや軽率な選択でした。7...Nxc3! 8.bxc3 c5 が最も自然な進行です。

8.Nxd5! exd5 8...Bxd5には9.e4!とテンポを取りつつ、センターを支配する手が強力です。

9.Bg5! f6?! 10.Bf4 c5 11.g3! Kasparovは黒キングを弱めながら自然に展開を進めます。11手目は11.e3も自然なアイデアですが、白マスビショップをフィアンケットすることでd5ポーンにプレッシャーをかけつつ、...Rc8に対してBh3のアイデアを準備できます。

11...g6 Bh3に対して...f5のアイデアを用意した手ですが、新たな弱点を作ってしまいました。

12.h4! g6にフックができたのを見て、積極的に崩しにかかります。

12...Qe7 13.Bg2 Bg7 14.h5 f5 15.Qd2 Bf6

白が十分なポジションを手に入れました。ピースもよく働いており、黒キングには明確に安全といえる場所がありません。

ここからがKasparovにとっては課題でしたが、Karpovと何度も対戦を繰り返すうち、Kasparovのテクニックは少しずつ改善していきました。

16.Rc1! Rc1-Rc3-Re3とeファイルから黒キングを攻略しにかかります。

16...Rc8 17.Rc3 Rc6 18.Re3 Re6 19.Rxe6 Qxe6 20.Ng5 Qe7 21.dxc5 Nxc5 22.hxg6 ルークを交換し、ポジションがオープンになりました。白のアタックは強力で、ついにKarpovが斬られたかにみえます。しかし…。

22...d4! Karpovもポジションを複雑にして応戦します！この勝負術にKasparovは何度も苦しめられてきました。

23.g7? 「私はエキサイトしすぎており、正確に読むことができなかった」とはKasparovの言です。gポーンを捨てることで、黒のポーンの連携を断とうとするアイデアですが、ここは素直に23.Bxb7で十分でした。以下、23...Qxb7 24.f3 hxg6 25.Rxh8+ Bxh8 26.b4! Nd7 27.Qa2 Nf8 28.Ne6! はDorfmanが示したラインで、白クイーンが黒キングの周りに侵入できれば、白勝勢となります。

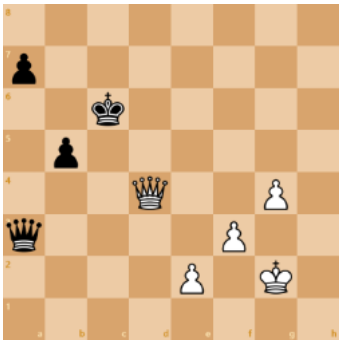
23...Bxg7 24.Bxb7 Qxb7 25.f3 Qd5! Karpovはクイーンをセンターに戻して抵抗します。ポーンの形が良い白にわずかなチャンスがありそうですが、もはや有利とは呼べないポジションになってしまいました。ですが、Kasparovは慌てず次のチャンスを待ちます。

26.Rxh7 Rxh7 27.Nxh7 Qb3?! 27...d3! 28.b4 Qb3!と迫れば互角でしたが、時間切迫のKarpovはノータイムで27...Qb3と指しました。Kasparovいわく「Karpovは明らかに次の手を見落としていた。」

28.Bd6! 次の29.Qg5が強力なスレットになっています。白の攻撃を軽減すべく、Karpovはクイーンエンディングに逃れました。

28...Ne6 29.Ng5 Bh6 30.Bf4 Bxg5 31.Bxg5 Nxg5 32.Qxg5 Qxb2 33.Qxf5 キングサイドのコネクテッドパスポーンが強く、白にだけチャンスのあるポジションです。このエンドゲームも複雑で面白いのですが、深刻なタイムトラブルに陥っていたKarpovには難しすぎるエンドゲームだったかもしれません。

33...Qc1+ 34.Kf2 Qe3+ 35.Kf1 Qc1+ 36.Kg2 Qxa3 37.Qh5+ Kd7 38.Qg4+ Kc6 39.Qxd4 b5 40.g4



40...b4? 封じ手直前のこの手が

決定的なミスでした。40...Qe7!であれば正しい手を探すのは難しかった、とKasparovは言っています。

41.g5! 1−0
以下、41...b3に対して、42.g6! b2 43.g7 Qa2 44.Qe4+ Kc5 45.Qe7+ Kb6 46.Qd8+ Kb7 47.g8=Q Qxg8+ 48.Qxg8 b1=Q 49.Qd5+で白良しのエンドゲームになる、というのが後のKasparovの分析です。

しかし、Kasparov陣営は夜の間に41...b3 42.Qe4+ Kd6 43.Qe8? (43.Qg6+!+-) という順を検討しており、この変化は黒が正しくプレーするとドローになります。
つまり、まだまだ難しいポジションだったのですが、形勢を悲観していたKarpovは次の日の朝、アービターに電話で投了を告げたのでした。

この勝利はKasparovにとって、Karpovに対する人生初の勝利でした。スコアのうえでは焼け石に水の1勝でしたが、この勝利には思わぬ効果がありました。完全な内容ではなかったとは言え、Kasparovにとってはタフな戦いの後の勝利であり、Karpovにとっては完全勝利の夢が潰えた敗北でした。
このゲームを境にマッチの流れは一変します。勢いにのったKasparovは複雑なポジションでいつものプレーを取り戻し、Karpovを追い詰めました。まだKasparovのテクニックは勝ち切るのに十分ではなく、Karpovも強靭なディフェンスを見せていましたが、それでも主導権がKasparovにあるのは明らかでした。

第27局以降、Karpovは20局以上指して一度も勝てませんでした。これほど1勝が遠かったことは、Karpovのチェス人生ではありません。疲労も溜まるなか、ついにKasparovは第47局と第48局で連勝します。スコアは5-3となりました。

ここで事件が起こります。FIDE会長Campomanesが、両対局者の健康を理由にマッチの打ち切りを宣言したのです。
突然の打ち切りは当然、物議をかもしました。一説によれば、Karpovに近い立場にあったCampomanesが、Karpovの失冠を避けるためにこの決定を強行したとも言われています。Kasparovも、Karpovの体調はそれほど悪くなく、Karpov陣営が負けを恐れたからだと考えていました。リードしているとはいえ、心理的にもプレーの質でもKarpovが遅れを取り始めていました。さらにKarpovには、1978年の世界選手権でKortschnojに5-2から追いつかれたトラウマもあります。有利なうちに妥協する判断をしたのも、仕方のないことと言えるでしょう。
結局、1984年のマッチは5ヶ月間で史上最多の48局が行われ、無勝負となりました。世界選手権で決着がつかなかった例は、今でも1984年のマッチだけです。

この世界選手権は1985年9月に再開しました。24戦して勝ち越した側が王者となる条件です。12-12の場合はKarpovの勝利とし、さらにKarpovが負けた場合は翌年リマッチを行う権利も与えられました。
両対局者は再開までの間、別々のイベントでプレーしましたが、一度も負けることなく他のプレーヤーとの格の差を見せました。

そして迎えたマッチの初戦。Kasparovは、前年までのKasparovとはまるで別人になっていました。5ヶ月に及ぶKarpovの「レッスン」を糧として、より完全なプレーヤーへと進化を遂げていたのです。

Kasparov, G (2700)
Karpov, A (2720)
World Championship 1985 (1)

1.d4 Nf6 2.c4 e6 3.Nc3 Bb4 4.Nf3 c5 5.g3!? Karpovを驚愕させたオープニングチョイスです。KasparovもKarpovも、これまでこのポジションを指したことは一度もありませんでした。

5...Ne4 6.Qd3! Qa5 7.Qxe4 Bxc3+ 8.Bd2! Bxd2+ 9.Nxd2 Qb6 10.dxc5 Qxb2 11.Rb1 Qc3

12.Qd3!　Kasparovの進化を見て取れる一手です。クイーン交換後のポジションでは、前年のKasparovはいつもKarpovに上回られていました。それがこの第1局では、Kasparovの方からクイーンを交換したのです。

12...Qxd3　13.exd3　センターのポーンとbファイル、そしてh1-a8のダイアゴナルが、黒のピースの展開を妨げています。

13...Na6　14.d4　Rb8　15.Bg2 Ke7?!　黒は抑え込みを避けるため、15...e5!　とする必要がありました。

16.Ke2 Rd8 17.Ne4 b6 18.Nd6!±　d6のオクトパスナイトがc8ビショップを完全に抑え込み、白が有利なポジションになりました。この後も、Kasparovはクイーンサイドにプレッシャーをかけ続け、1ポーンアップのルークエンディングを難なく勝ちきったのです。ポジショナルプレーの弱点は、過去のものとなりました。

王者Karpovもただでは倒れません。第4局、第5局で連勝し、スコアをひっくり返します。複雑で難解な戦いが続き、どちらもすぐに精神的なストレス、疲労を抱え始めました。ミスも増え、互いにアドバンテージを手放してしまう展開が続きます。

第11局では、Karpovが簡単なタクティクスをうっかりし、Kasparovが同点に追いつきます。その後の第16局、Kasparovの勝利がマッチの行方を決定付ける重要なゲームでした。このゲームについては、過去にYouTubeの配信で詳しく解説しています。
https://www.youtube.com/watch?v=MFdRwFdzexc

挑戦者リードで迎えた第19局。このゲームもKasparovの進化を象徴する重要なゲームとなりました。

Kasparov, G (2700)
Karpov, A (2720)
World Championship 1985 (19)

1.d4 Nf6 2.c4 e6 3.Nc3 Bb4 4.Nf3 Ne4　珍しい選択ですが、過去にはAlekhineとEuweの世界選手権でも指されています。

5.Qc2　f5　6.g3　Nc6!?　このゲームではKarpovの方から新手を繰り出しました。序盤の準備はKasparovの大きな強みでしたが、このゲームでは追いつきたいKarpovの方から主導権を取ろうとしています。

7.Bg2 O-O 8.O-O Bxc3 9.bxc3 Na5

これが黒の予定の作戦でした。c4を上手く守る手はなく、c4-c5とポーンを突く手に対しては...b7-b6か...d7-d6としてcファイルにプレッシャーをかけてきます。

このアイデアに対するKasparovのリアクションが秀逸でした。

10.c5!　d6　11.c4!　11.cxd6?は11...cxd6 12.c4 Bd7から13...Rac8が厳しくなります。そこでKasparovはポーンサクリファイスして、スペースを活かしながら素早くプレッシャーをかけることを目指します。

11...b6!　11...dxc5?! には12.Ba3! Nc6 13.Rad1 で白良しです。そこでKarpovも12.cxd6を強要してきます。

12.Bd2!? Nxd2 13.Nxd2

13...d5?　非常に判断の難しいポジションで、Karpovは黒マスを弱める判断をしました。13...Bb7には14.Bxb7　Nxb7　15.c6　Na5 16.d5±でa5のナイトが置き去りになってしまいます。

Stockfishの推奨は13...Rb8! 14.cxd6 Qxd6± で、白が良いもののa5ナイトが復帰してくるチャンスがあります。

14.cxd5 exd5 15.e3　黒の弱点はe5のアウトポストです。そうなるとすぐにe5へナイトを向かいたくなりますが、黒にも...Nc4の反撃があります。

KasparovはここからKarpovのように、時間をかけてe5の弱点を利用し始めます。

15...Be6 16.Qc3 Rf7 17.Rfc1 Rb8 18.Rab1 Re7 19.a4 Bf7
白はまずクイーンサイドの形を固定して、黒が簡単にポジションを改善できないようにします。次に目指すことは、黒の...Nc4の可能性を消しておくことです。

20.Bf1!　ビショップを切り替えてc4のマスを強化するのが好手。白がだいぶ優勢になりましたが、それでもまだ、Nf3-Ne5のタイミングではありません。

20...h6 21.Bd3 Qd7 22.Qc2
f5のポーンにプレッシャーをかけて、...g7-g6を誘導します。Nf3-Ne5の切り札を出す前に、可能な限りポイントを稼いでおきます。

22...Be6　23.Bb5!?　23.Nf3 Nc4 24.Bxc4 dxc4 25.Ne5+- も可能ですが、Kasparovは焦らず指すことを徹底します。23...c6を突かせてターゲットにするアイデアです。

23...Qd8　24.Rd1!　...Nc4に対してBxc4とした際、dファイルはオープンファイルになります。先にdファイルにルークを設置しておくのが、最後の準備です。

24...g5 25.Nf3! Rg7 26.Ne5
ついに白のアイデアが実現しました。

26...f4

27.Bf1!?　このビショップはa6-f1ダイアゴナルでの役割を終えたので、g2に移動してe3-e4を目指します。後の分析では27.Bd3! から28.e4 を目指すのがベストとされています。

27...Qf6 28.Bg2 Rd8 29.e4 dxe4

30.Bxe4+−　ポジションが開き、戦いが起こったときにはもう白勝勢となっていました。ついにKasparovのプレーが王者Karpovのプレーを完全に上回ったのです。

30...Re7 31.Qc3 Bd5 32.Re1 Kg7 33.Ng4　Qf7　34.Bxd5　Rxd5 35.Rxe7　Qxe7　36.Re1　Qd8 37.Ne5　Qf6　38.cxb6　Qxb6 39.gxf4 Rxd4 40.Nf3 Nb3 41.Rb1 Qf6 42.Qxc7+ 1−0

これでKasparovは残り5局で2ポイントとれば勝てる状況となりました。Karpovは第22局で乱戦を制し、後一歩のところまで迫りましたが、最終局に白番で敗北しました。トータルスコアは13-11、マッチの軍配はKasparovに上がりました。

Kasparovは第13代世界チャンピオンとなりました。22歳での戴冠は、Talの持っていた記録を塗り替え、当時の史上最年少記録でした。Karpovは1986年のリマッチ、1987年、1990年と3度Kasparovに挑戦しましたがいずれも僅差で敗れ、Kasparovから王座を取り返すことはできませんでした。

その後、Kasparovは世界選手権の開催を巡り、FIDEと衝突。1993年にプロフェッショナルチェス協会（PCA）を設立し、FIDEを脱退して独自に世界選手権を開催しました。ここからマッチで戦う古典的世界チャンピオンと、

FIDEがトーナメントで決めるFIDE世界チャンピオンに分かれる、王座分裂の時代が始まります。この時代はKramnikとTopalovが統一戦を行う2006年まで続きました。

また、Kasparovはチェスコンピュータの開発とも深く関わっており、チェス専用のスーパーコンピュータやプログラムと何度もマッチを行いました。1997年にIBM製のディープブルーと対戦して敗れたことで、チェスで初めてコンピュータに敗れた世界チャンピオンとしても記憶されています。

Kasparovの登場により、古典的なチェスの歴史は一つの区切りを迎えたといって良いでしょう。Kasparovは、Steinitz以来磨かれてきたポジショナルプレー、AlekhineやTal、Fischerの創造力、Botvinnikの分析力、Karpovの精緻な技術をすべて兼ね備えた史上最強のチャンピオンとしてチェス界に長く君臨しました。この連載ではそうした古典的チェスの歴史をたどり、最強のスタイルを紹介するところまでたどり着きました。

古典的な名プレーヤーから様々なスタイルを学ぶ本連載の目的も、ここでひとまず完結となります。

Kasparovの登場以降、現代チェスは新たなステージへ進みました。

彼が最初に深く関わったコンピュータは、現代チェスに不可欠な要素となり、オープニング研究はより厳しさを増しました。定跡や古典的な常識も、ときに否定され、ときに更新され、日進月歩で進化しています。

インターネットの発達により、誰もが世界中のプレーヤーと対戦できるようになりました。チェスの教材は過剰なほどに供給されており、プレーヤーの成長は著しく促進されました。今日では、まだ幼いプレーヤーがGM顔負けのプレーをすることも珍しくありません。

しかし、学ぶ手段が増え急成長することで、自分の頭で考えることが難しくなってきた時代であることもまた事実です。

だからこそ、チェスの歴史を学ぶ価値があります。過去の名局や名プレーヤーの考え方を吸収することで、思考方法そのものを学ぶことができるのです。

本連載では紹介できなかったゲーム、プレーヤーは数多くあります。ぜひ本連載を入口として、自分のお気に入りの名プレーヤーを見つけ、自分なりのチェス観を磨いていってほしいと思います。

長らくのご愛読、ありがとうございました！

連載

チェス大会 in アメリカ

【文】上杉賀子

- 全米高校チャンピオン/FIDE マスターへの軌跡 -

息子（上杉 晋作・2007 年高校 1 年生で全日本史上最年少チャンピオン）が 2009 年チェス国籍日本の最年少 FIDE マスターとなり 2010 年全米高校選手権で優勝するまで（さらにアメリカの Senior Master の資格となる USCF レート 2400 の壁を超えるまで）参戦した、アメリカの全ての公式戦、約 180 大会の様子を順番に載せてみようと思います。渡米から 1 年半、紆余曲折を経て現地生活に馴染んできた頃、小学校のチェスクラブの案内を見かけて入部。これが始まりでした。その一年後、いよいよトーナメントプレーヤーとして出陣です。

NO. 86　フォックスウッズ・ブリッツ

2007 年 4 月 8 日
晋作(15歳)の結果：7.0P/10Games
大会詳細：USCF サイトより

気を取り直して（＊）夜はブリッツトーナメント。ここでの第 2 戦が注目でした。私は何も知らず、やけにギャラリーが多くて相手の方の写真をとりまくっているなあと思っていたら、相手の Jorge Sammour-Hasbun さんが世界的に有名と、晋作を大事にしてくれている TD のマイクさんに聞いて、ずっとビデオをとりました。1 回目に負けて 2 回目、本当にあと少しでした。晋作が勝ちそうでギャラリーは騒然となり、誰かが晋作によくやったと握手をしにきてくれたそうです。あとで JORGE さんが私に晋作は「very good, very fast」と言ってくださいました。

ブリッツ最終局では 7th Grade の National Co ー Champ、最近 CA であった K-9 で友達の C.T 君と優勝を分けた A 君とぎりぎりスプリットになってしまい、残念でした。が、このところ特に親同士はかなり親しくなっていましたが、本人同士もおたがいに余計に親しくなり ICC のハンドルネームを交換していました。また、以前から「私は」知り合いだったカリフォルニアの 2100 台のお兄さんや、他にも何人かのお兄さんたちとも親しくなったようです。

ちょっとしたハプニング：FM Ray 君母子に最後の 1 泊だけ Room Share を頼まれて引き受けました。NY 経由で来たそうで、誰かに NY まで乗せて帰ってもらう予定でしたがそれがうまくいかなくなり（ドロップアウトで早く帰ってしまう人が多くて）夜はちょっと怖いので一晩寝て朝向かうことにされました。ブリッツが終わったのが夜中 1 時前、そして朝早く出てきたので晋作は Ray 君と話す時間があまりありませんでしたが（彼はナイトさんとの試合分析に時間がかかって ブリッツ申し込みに間に合いませんでした）朝、Ray 君ママと私は Hug して次の大会で会いましょうと言って別れました。Ray 君はまだ寝ていました。これで彼が GM になったら確実にサインはいただけるでしょう！？（その後 Ray Robson 君は GM になりました！）

それからこの大会でも日本人との新しいつながりができました。これからやりとりするのが楽しみです。異国のチェス大会で日本語で話し合えるということはとてもありがたく、楽しいチェス旅行になりました。

＊4 月 4 日～8 日のオープンクラスで 4.0P/9、「今年はやはり厳しい大会でした。」（CHESS Magazine,#23,p.41）

ボビー・フィッシャーの全米最年少シニアマスター記録を塗り替えた Jorge Sammour-Hasbun との対戦

ボランティアスタッフ募集のお知らせ

日本チェス連盟

日本チェス連盟は、日本におけるチェスの普及と振興を目的として、大会やイベントの企画・運営、レーティング管理、会誌制作、動画配信など様々な活動を行っています。これらの取り組みはすべてボランティアによって支えられており、年齢や性別、チェス歴を問わず集まった約30名のスタッフが「より多くの人にチェスを楽しんで欲しい」という思いを共有して活動しています。オンラインでの活動が中心であるため、居住地を選ばず、在宅で行えるのが特徴の一つです。

コロナ禍以降、お陰様で日本チェス連盟の会員数は1000人を突破、大会参加者数は延べ1600人を突破と急速に増加しており、日本におけるチェスの盛り上がりを実感しています。その一方で、連盟の運営を支える人員の確保が追い付いておらず、2026年以降の活動継続が困難に陥っています。そこで、会員の皆さまをはじめ、日本チェス界の継続や更なる発展を応援したいという思いをお持ちの方に、スタッフに加わっていただきたく考えております。

より多くの方に気軽にご参加いただけるよう、従来のスタッフ募集から以下の点を変更しました：

- ご協力いただきたい業務の軽量化
- スタッフ特典の拡充（大会参加費の無料化や新たな特典の追加）
- 採用フローの簡略化

詳細につきましては下記ページの募集要項をお読みいただき、前向きにご検討くださいますよう、お願いいたします。
https://japanchess.org/2025/12/staff-recruitment-ver2/

またスタッフ募集のアップデートに加え、大会ごとの運営メンバー募集や、数か月の期間限定でのインターン募集も新たに開始することとしました。ボランティアスタッフとして恒常的にご協力いただくことが難しい方でも、ご事情に合わせた形でご参画いただくことができます。こちらも合わせて応募をご検討いただきますよう、お願いいたします。詳細は以下の各ページよりご確認ください。

- 「実行委員会メンバー募集」（大会ごとの募集）
- 「スポットインターン募集」（数か月の期間限定での募集）

この機会に、ボランティアスタッフと一緒に日本でのチェスの輪を広げる活動に加わっていただけますと幸いです。皆さまのご応募を心よりお待ちしております。

初めての相手と、気軽に指せる楽しみ

Chess Center UENO

各部入場料　500円

営業時間			
木曜日	1部 17:00▼22:00		
土曜日	1部 10:00▼14:00		
日曜日	1部 10:00▼14:00	2部 14:00▼18:00	

※最終入場は各営業日の終了30分前です。

チケットご購入
(Peatix)

チェスセンター上野

東京都台東区北上野2-11-3シルバーフラット101
Access：
東京メトロ日比谷線　入谷駅　徒歩8分
東京メトロ銀座線　稲荷町駅　徒歩9分
JR/東京メトロ　上野駅　徒歩11分

公式HP：リンク
お問い合わせ：info.chesscenterueno@gmail.com

1人でもOK
スタッフがお相手します！

各部最大16人
みんなで一緒に！

保護者の付き添いOK
未成年1人につき1人まで無料

所在地
(Google Map)

※価格、営業時間は掲載時点のものです。

編集部
木下奏子　神田大吾
山内美加　真鍋浩
鈴木秀聡　桑田晋
森谷真理子　（順不同）

発行
一般社団法人 日本チェス連盟

本誌に掲載された写真、イラスト、記事、棋譜の解説等について、無断転載および無断配布を禁止します。著作権はそれぞれのクリエーターにあります。
ご意見 ・ ご感想などは japanchess.editor@gmail.com までお寄せください。